

潮木 守一

名古屋大・桜美林大名譽教授



大都市圏では教員の大量採用が続いているが、潮木守一名古屋大・桜美林大名譽教授は、2020年代には東北や九州の採用数が大都市圏に近づくと、今後10年間で地域ごとに採用数が激しく増減すると推計、大学に経営戦略の見直しを求めている。

大量採用が原因である。

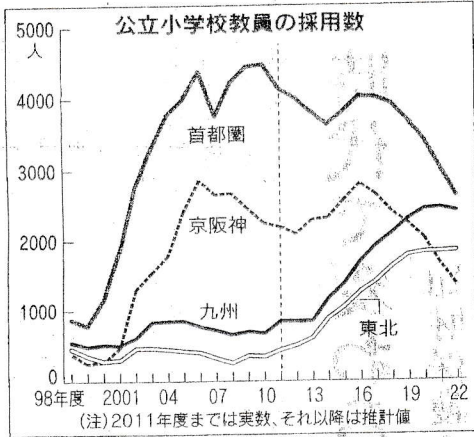
一例を東京都にとれば、00年度以前はせいぜい年間3000人ほどしか採用しなかった。ところが04年度以降は14000人規模の大量採用が7年以上も続いている。それとともに採用試験の競争率は急激に低下し、04年度には2・1倍まで下がった。1997年度の8・4倍と比較すると、その低下は明らかだ。

□ □ □

小学校の教員を養成する課程を新増設する大学が相次いでいる。03年度は220大学だったが、10年度には334大学に増えた。特に私立大学での新増設が著しく、わずから年々低下を続け、06年度には2倍を切った。競争倍率は01年度の31倍から年々低下を続けている。この新増設の背景には、関係者の間では2倍を切ることは避けるべきだという意見が多い。

大阪府でも99年度は採用数44人まで落ち込んだ。ところが02年度以降は急激な増加に転じ、その結果09年度には1370人と、実に10年前の30倍以上の増加となった。競争倍率も01年度の31倍から年々低下を続けている。この新増設の背景には、関係者の間では2倍を切ることは避けるべきだという意見が多い。

# 教員養成 戦略見直しを



ただこの教員の大量採用は、世間一般の納税者からみれば、納得いかないうちの出生数は年々減少を続け子供の数が減っているのに、なぜ大量の教員を採用する必要があるのか。これが世間の常識的な疑問であろう。

問題の原因は、すでに採用され勤務している現役教員の年齢構成にある。とくに大都市圏では50歳代の教員が多く、この数年で大量の教員が定年を迎える。それを補充するために、新規採用が年退職者を補充するだけにとどまらず、規模を拡大しており、定年前の教員が千人強の必要となる。

例えは東京都の小学校教員のうち、最も数が多

いのは、今年55歳前後の教員である。つまり毎年9000人程度の規模の教員が、定年を迎えることになる。さらに大阪府の場合には、55歳以上の定年前の教員が千人強の規模に拡大しており、定年前の教員が千人強の必要となる。

このように年齢構成の偏り、今から30年ほど以前の大規模採用に原因がある。

ただこの教員の大量採用は、世間一般の納税者からみれば、納得いかないうちの出生数は年々減少を続け子供の数が減っているのに、なぜ大量の教員を採用する必要があるのか。これが世間の常識的な疑問であろう。

## 採用数 今後10年で激しく増減

採用数が30年周期で繰り返すのはなぜか。これはまた民間企業人には理解しにくい点であろう。その原因はひとえに税金で運営されている公立学校の仕組みにある。民間企業では将来の人事構成の偏りを避けるために、人員が余り気味でも、毎年最低限の新規採用を行っている。そして従業員

の年齢構成を少しずつ調整してゆく。ところが税金で賄われている学校には、余剰教員を抱えることは認められない。逆にわが子のクラス担任の教員がいなかったら、親は困る。これが分れば、学校は黙っていない。学校は、その時点ごとに、きつちり定員通りの教員を配置しなければならぬ仕組みになっている。

しかし現在のよう

な大量採用がいつまでも続くわけではなく、いつかはピークがくる。そのピークがいつになるのかが、大きな関心の的である。文科省はこれまで推計の基礎となる「学校教員統計調査」を実施してきたが、10年度の報告書

(デジタル版)で大幅な改定を行い、推計に必要なデータすべてが公表されるようになった。その結果、教員養成課程の卒業生が出るころ、どれほどの教員採用があるのか、かなりの程度の推計が可能になった。この統計をもとに教員1人当たり児童数を12年度のままで仮定して推計してみた。要点は次のようになる。

近年、大量採用が続いている学校には、余剰教員を抱えることは認められない。逆にわが子のクラス担任の教員がいなかったら、親は困る。これが分れば、学校は黙っていない。学校は、その時点ごとに、きつちり定員通りの教員を配置しなければならぬ仕組みになっている。

この統計をもとに教員1人当たり児童数を12年度のままで仮定して推計してみた。要点は次のようになる。

一方、採用数が底辺をはっていった東北(青森、岩手、宮城、秋田、山形、福島)、九州(福岡、佐賀、長崎、熊本、大分、宮崎、鹿児島)では、定年を迎える教員が増えることが求められる。

# チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について(中間まとめ)

## ○「チームとしての学校」が求められる理由

社会の変化と学校を取り巻く状況の変化

### ○ 多様化・複雑化する子供の状況への対応

- いじめ・不登校などの生徒指導上の課題や特別支援教育への対応など、子供を取り巻く環境が複雑化・困難化
- 貧困問題への対応や地域活動など、学校に求められる役割も拡大

### ○ 学校教育の質的充実に対する社会的要請の高まり

- 主体的・協動的に学ぶ課題解決型授業(アクティブ・ラーニング)の実施や小学校英語教育などの新たな教育課題への対応

### 我が国の教職員の現状

- 我が国の学校は、教員以外の専門スタッフの割合が諸外国と比べて低い現状
- 日本の教員は授業以外に生徒指導、部活動等の授業以外の業務を多く行っており、授業等に専念することができない現状

○ 教員の専門性だけでは対応が困難になっており、教員の専門性の向上を図るとともに、教員に加えて多様な専門スタッフを配置し、様々な業務を連携・分担してチームとして職務を担う体制を整備

⇒ 学校の教職員構造を転換、学校の教育力・組織力を向上させ、一人一人の子供の状況に応じた教育を実現

## ○「チーム学校」を実現するための視点とその方策

**視点1 専門性に基づくチーム体制の構築** (教員、事務職員、専門スタッフ等が連携・分担し、それぞれの専門性を発揮できる体制の構築)

➤ 多様な専門スタッフが子供への指導に関わることで、教員のみが子供の指導に関わる現在の学校文化を転換

(制度関連)

- 心理的・福祉的な専門スタッフの学校における位置付けを明確にし、配置充実につなげるため、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーを法令に位置付け
- 教員以外に、部活動の指導、顧問、単独での引率等を行うことができるよう部活動支援員(仮称)等を法令に位置付け
- 地域との連携の推進を担当する地域連携担当教職員(仮称)を法令上明確化

(予算関連)

- アクティブ・ラーニングの実施や特別支援教育等に対応するために必要な教職員定数措置の拡充
- スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーを将来的に教職員定数として算定し、国庫負担の対象とすることを検討
- 部活動支援員(仮称)を任用する際の必要な研修について検討

**視点2 学校のマネジメント機能の強化** (校長がリーダシップを発揮できる体制の整備)

➤ 多様な専門スタッフをひとつのチームとしてまとめるために、これまで以上に学校のマネジメントを確立、学校の組織力・教育力を向上

(制度関連)

- 学校教育法上の事務職員の職務規定の見直し
- 主幹教諭育成のため実践的な研究プログラムを開発
- 校長裁量経費の拡大等、学校の裁量拡大を一層推進

(予算関連)

- 事務職員の配置の更なる拡充を実施
- 管理職を補佐する主幹教諭配置促進のための加配措置の拡充

**視点3 教員一人一人が力を発揮できる環境の整備** (教職員の人材育成や業務改善等の取組を推進)

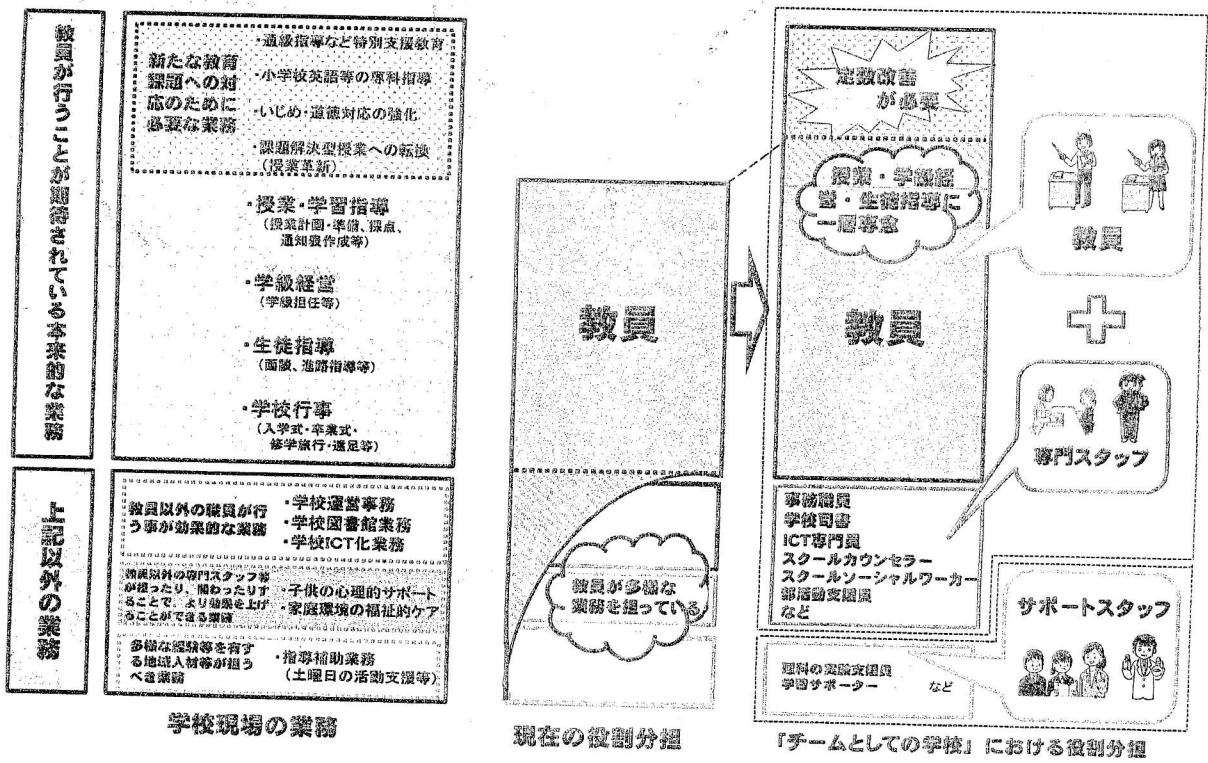
(その他)

- 効率的・効果的な校務運営を実現するため、業務改善に関する取組事例等をまとめた指針の作成
- 文部科学大臣優秀教職員表彰において、学校単位等の取組を表彰
- 人事評価の結果を任用・給与などの処遇や研修に適切に反映

(予算関連)

- アクティブ・ラーニング実施等のために必要な研修が実施されるよう、小規模市町村における指導主事配置を支援

## 「チーム学校」の実現による学校の教職員等の役割分担の転換について(イメージ)



「チーム学校」の実現による学校の教職員等の役割分担の転換について(イメージ) 作業部会事務局(作成)

< 教員の負担が多く、やる人もいる >

モンスター  
ペアレンツ

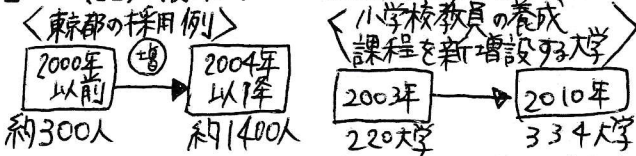
仕事量多

P100~103

教育原論リアクション (第11回、2019年6月28日) 教師について (その2)  
番号 1960 氏名

- 1 前回リアクション (6月21日) を読んでの感想  
同じ教育でも、日本と欧米では教員の仕事内容が大きく違うんだなと思った。  
欧米は時間の使い方が上手いと思った。クラス運営を担任だけにまかせる  
のではなく、学校全体で協力していると思った。そうすれば、教員の負担も減る  
し、生徒もきりかえがしかり出来ると思うので日本も見習うべきだと思った。

- 2 (A) 潮木守一「教員養成戦略の見直しを」(2012年) を読んでの感想



- 3 (B) 毎日新聞「授業外の仕事に追われ」(2014年) を読んでの感想

政治家  
働け  
財務省

< 仕事内容 > etc... → 多すぎ  
・部活動 → 12年度にか病で496人休職  
・授業・特別支援 → 「いっ倒水てもおかしくない」  
・休み時間... → 「もう一度仕事に教員をたい (少ない)

- 4 (C) 清水義弘「現代教師のカルテ」(1989年) を読んでの感想

1. 教師は子ども社会に安住する、学校は基本的に「子ども社会」 → 教師が「子ども社会の上」にた現る。
2. 教師は互いに競争しない。「安定した職業」 → 男女の結婚の差もなく、後産することもない。
3. 教師は教えるが学ばない → 教員免許を持っているため先輩も後輩もない。
4. 教師はただ教科書を教えるばかり
5. 教師は教室の中の子どもしか知らない → 子どもの全てを知っているのではない。

- 5 (D) 伊藤潔志「先生ってなぜ大変なの？」で指摘していることは何か。

- ・ 仕事内容が多く多忙である
- ・ 指導方法で求められることが多い
- ・ 授業以外にも事務が多い
- ・ 生徒だけでなく親とも対峙する
- ・ 人数が少ないのに仕事量が変わらない

- 6 (E) 教師のメンタルヘルスを図るには、何をすればいいのか。



- 7 (F) 「チーム学校」とは何か。これで教師の置かれた状況は改善されるか？

- ① 専門性に基づくチーム体制の構築  
・ 担任だけでなく運営する。
- ② 学校のマネジメント  
・ 校長先生Fight!!
- ③ 教員1人が力を発揮できる環境の整備  
・ 教員の働きやすい場E!

案はいろいろあるが、現状決がひどい  
ため、改善はなかなか難しい。

- 4 他の人からコメントをもらう。

( ) → ( 全2手とめられ2い2と2も見やあ )